The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『狭衣物語』構造論 : 巻二の女二宮物語について
Author(s)	片岡, 利博
Citation	語文. 1987, 48, p. 32-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68756
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『狭衣物語』構造論

――巻二の女二宮物語について――

片岡利博

〔テキスト〕『狭衣物語』日本古典文学大系79（岩波書店）

稿中、これを引用する際に、表記法を改め、括弧内に私注を記した箇所がある。なお、引用本文末尾の括弧内の数字は、このテキストのページ数と行数を示す。

1

『狭衣物語』に女二宮がはじめて登場するのは巻一の天稚御子降下事件に於いてである。すなわち、物語第一年の五月五日、宮中での音楽会に狭衣が吹いた笛の音をめでて天稚御子が降り来たり狭衣を天へ誘ったのを、帝が引き留め、その代償として最愛の女二宮を与えようと仰せられたのがそれである。その故に、女二宮は「身の代」（五〇―13）、あるいは「身の代衣」（一二九―14）という比喩で表現される。また、巻二においては「笛の禄」（一二二―14）という比喩によっても表されている。

この天稚御子降下事件は、物語の最初から周到に準備された伏線に沿って出てくるものであり、狭衣のたぐいまれな資質を紹介したくだりで、「母宮などは、天人などのはじめて天下りたまひたるにやと、いと恐ろしくかりそめにのみ思ひきこえさせたまひて」（三三―4）あるいは「琴・笛の音につけても雲ゐを響かし、この世の外まで澄み昇りて、天地を動かし、人の心も驚かしたまふべければ、いとあまりゆゆしう親たちも思して」（三五―9）などとあった叙述を受けている。したがって、天稚御子降下事件は狭衣の超人的な資質を物語る一つの事件として配置されたと考えられるのであるが、女二宮の物語の端緒はここから紡ぎ出されてくるという構造になっているわけである。

こうして登場してくる女二宮は、狭衣とは従妹（狭衣の父方の叔父の娘）であり、物語の始発以前から狭衣の理想の女性として設定されている源氏宮もまた狭衣の従妹（狭衣の母方の伯父の娘）である。このことを物語は「いづれも昔の御ゆかり離れぬ御仲ども」（五一―2）と表現している。ここにおいて、女二宮が源氏宮と対比的にとらえられていることは明らかであり、狭衣は源氏宮と女二宮のいずれかの選択を迫られるのであるが、その決定は実に簡単であって、

紫の身の代衣それならばをとめの袖にまさりこそせめ（五一―1）

とあり、また、

いろいろに重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜半の狭衣（五二―11）

などとあって、源氏宮の優位はほとんどア・プリオリに措定されて

いるといってよい。したがって、この「身の代衣」の登場は狭衣の源氏宮への執着をより強化する結果をまねくにとどまる。なぜ女二宮ではなくて源氏宮を選択するのかという理由を物語はまったく語っておらず、〈源氏宮の絶対的優位性〉とでもいうべき性格が、ここから読み取られねばならないであろう。

女二宮と源氏宮の対比はもう一箇所、狭衣と父堀川大殿との対話の場面（五七―12～六二―10）にも認められる。源氏宮の東宮入内問題に関して大殿が狭衣に相談した際に、狭衣に女二宮降嫁についての返答を催促し、狭衣が、

ほかざまに藻しほの煙なびかめや浦風荒く波は寄るとも

と決意する、というくだりである。ここでも女二宮の登場が狭衣の源氏宮への執着をより強化しているのであって、〈源氏宮の絶対的優位性〉という構造が明確に読み取られるのである。

物語巻一はこのあと飛鳥井女君の物語に入ってゆき、女二宮はしばらく物語の表面には現れなくなる。そして、巻二に到って、狭衣の大将への昇進を語り、源氏宮の東宮入内計画(i)にふれたのにひき続いて、女二宮降嫁のことが再び取り上げられるのである。この後、巻二の前半はもっぱら女二宮関係の物語に当てられている。この巻二に配された女二宮をめぐる物語を「女二宮物語」とし、以下、この部分の叙述の構造をみてゆくことにする。

2

巻二の女二宮物語は「内裏には女二宮のさかりにととのはせ給ふを見たてまつらせ給ひて、なかなか見たてまつる人なからむ、口惜しう見えさせ給ふを……」（一二二―4）と語り出される。すなわち、帝が、女二宮の婿選びを積極的に考えはじめられたというところから、この部分の物語は始められるのである。そして、堀川大殿との対面のときに「かの笛の禄」の一件を持ち出し、大殿がこれを了承するというふうに展開するわけで、巻一の天稚御子降下事件との繋がりは明瞭に読み取れるのであるが、これは、巻一での状況設定を単にくり返し語っているわけではないことも読み取っておく必要がある。巻一では、女二宮は天稚御子の「身の代」であり、「笛の禄」でしかなかったが、ここでは女二宮の後見を狭衣に委ねたいとの、帝の意向が前面におし出されているのである。だからこそ大殿も、狭衣が乗り気でないことを承知していながら、帝の申し出を了承せざるをえなかったのである。帝のこうした意向は巻一では語られなかったものであり、以下の物語の構造を考える際に重要なファクターとなるべきものである。

この帝の意向が堀川大殿から狭衣に伝えられたとき、狭衣はこう答える。

それよりまさりて、何事のさぶらはんにか、もの憂く思ひ給へん。ただ、かく心に任てならひ侍りて、苦しきこともやと思ひ給へれば、今しばしもなどこそ。かの大宮のあるまじきことにのたまふなる様ぞ、むつかしう侍るべき（一二三―16）

はじめの二文は諸本・諸注により異同があって、解釈が定まらないが、いずれにせよ、狭衣のその場凌ぎの逃げ口上でしかないし、第三文の「かの大宮の……」もすでに巻一（六一―12）で語られていたことである。巻一では狭衣のこうした優柔不断な反応に対して「とかくもただ今は聞こえ給はず」（六〇―12）という態度にしか出なかった大殿が、ここでは、「さやうの心し給へ」（一二三―13）と狭衣に命じるという、強い態度に出るのは、他ならぬ、上述の帝

の意向を受けているからである。

女二宮の降嫁についての狭衣の心は一二五頁1〜11行に長々と記されているが、要約すれば、これも〈源氏宮の絶対的優位性〉ということに集約されてしまう。帝や大殿の意向がどうであっても、源氏宮を諦めて女二宮と夫婦になる気にはなれない、というのである。

そして、この段は「このこと思し止まらむわざもがな」という狭衣の願望の表白で終わっている。

3

巻一での「身の代」としての女二宮の登場を「起」とすれば、巻二に入って帝が女二宮の降嫁に積極性を示したという展開は「承」にあたる。女二宮との結婚をかたくなに拒否する狭衣にとって、帝のこの意向は厄介な障害であり、「このこと思し止まらむわざもがな」という狭衣の願望が実現されるかいなかというサスペンシブな局面に、物語は到ったとみてよい。

そして、狭衣と女二宮の密通によって意外な展開を見せる、以下の部分は、これまでの展開とは別の角度からこの局面を切り開いていくという意味で、まさに「転」に相当するといえよう。

物語は、まず「中納言の内侍」というあらたな人物を登場させる。この人物は「大弐の乳母のおとと」（一二五—13）となっていて、狭衣方と女二宮方との両方に縁のある人物として設定されている。宮中に中納言の内侍を訪れた狭衣は、人少なな弘徽殿で女二宮を垣間見て、我を忘れ、宮と通じてしまう。

このときの狭衣の心情はまことに不可解である。狭衣は、源氏宮への一途な恋心を貫徹すべく、女二宮との結婚を強く拒否していた。そのことは、この弘徽殿への侵入の際にもくり返しかたられている（一三〇—9）し、宮と密通した直後（一三一—2）にも語られている。この物語がはじまって以来ずっと語られてきた〈源氏宮の絶対的優位性〉は、宮との密通の前も後もなんら変わってはいないのである。では、狭衣をして女二宮に通じさせたものは、いったい何だったのであろう。

そのことに問題をしぼって物語を読みなおしてみても、いっこうにその答えは得られない。女二宮の並々ならぬ容貌や容姿は随所に語られている。また、帝の前述の意向がある限り、この密通が必ずしも許され難いものではない、という弁解めいた理屈も述べられてはいる。しかし、あれほどまでにかたくなに拒絶し続けた女二宮と、なぜここでぬきさしならぬ関係をもつ気になったかという、狭衣の心理については、ただ一行、

後瀬の山も知りがたう、美しき御有様の近まさりに、いかが思しなりにけん（一三〇—16）

とあるのみで、なんら納得のいく説明が与えられないのである。

やや批判的に評すれば、『狭衣物語』は主人公狭衣の心理を描き出すことをおこたっている、といえよう。〈源氏宮の絶対的優位性〉についても、ことは同様であった。源氏宮のたぐい稀な容姿についてはくりかえし語られるが、なぜ源氏宮が狭衣の心理において絶対優位の位置に立つかという説明はまったくなかった。狭衣という男は、物語の筋の展開の必要に応じて、どのような女とでも、どのような関係にでもなれるのだ、といえば言い過ぎであろうか。かつて、尾上八郎は「作者は、大将と異なって、源氏の宮の描出を誤ってゐると思ふ」(ii)と述べたが、『狭衣物語』の最大の欠点は、巻一・巻二における狭衣の人物造型の杜撰さにあると、私は考えている。

ともあれ、女二宮との密通という、狭衣の不可解な行動によって物語は思いがけない方向に展開していくことになるのであるが、考えてみれば、狭衣の女二宮への密通は女二宮の降嫁を促す性質の事件でこそあれ、それを妨げるような事件ではなかったはずである。前節でみたように、狭衣は帝の意向を受けいれざるを得ない状況に追いつめられていたのであって、狭衣が女二宮を受け入れさえすれば、宮の降嫁を妨げるべき外側の事情は、大宮の反対以外にはなかったのである。しかし、その大宮の反対も、堀川大殿が「女はさぞ心も口もたてるやうなれど、上の御心にてぞあらんかし」（一二四—4）と言うとおり、帝の意向がある以上、決定的な障害ではなかった。したがって、女二宮の降嫁を妨げる外的な障害はなく、今、狭衣は女二宮に通じてしまったのであるから、「いろいろに重ねては着じ」という狭衣の決意は挫折したわけであって、女二宮の降嫁はここにおいて決定したというべきなのである。しかし、そうした予測に反して、物語はこのあと、女二宮の出家という意外な結末にむけて進展してゆくのである。この間の経緯については次節以下に述べる。

4

前節に述べたように、狭衣の密通は女二宮降嫁を決定的なものにするはずの事件であった。にもかかわらず、女二宮の降嫁が果たされなかったのは、狭衣の密通の事実が隠蔽されたからである。狭衣の密通という事実を知っていた人物は三人いる。それは、当事者である狭衣と女二宮、それに中納言の内侍である。この三人は何故密通の事実を隠蔽したのであろうか。

まず、狭衣から見てみる。狭衣は密通の翌朝、女二宮への後朝の文をしたため中納言の内侍にことづける。女二宮と大宮の悲嘆にくれる様子から事情を察知した内侍はその旨を狭衣にほのめかすが、これに対して狭衣は、「かばかりにて、かたじけなき方も心苦しさも、なべての様に思ひ過ぐしてやむべき心もせねど、さりとて、今はとて、ゆくりなく定まり居むことの、いみじう口惜しう」（一四一—13）思ったという。例の〈源氏宮の絶対的優位性〉である。そして、その後は「御文などもおのづからや落ち散らむと、つつましうて、おぼろけならでは参らせず」（一四二—16）という行動をとる。源氏宮との関係をなによりも最優先的に考える狭衣の姿勢が、密通の真相を隠蔽させたのである。

一方、女二宮はどうであろう。密通の前・後ともに、女二宮の心理を描写した箇所は少ないが、それらは一貫して、密通という事態をひたすら恥じる宮の心理を描いている。密通の最中には「かばかり知らぬ人に見ゆるが、あさましう恥づかしう」（一三〇—3）思い、狭衣から宥められては「中納言にさへ言ひ知らせむとのたまはする恥づかしさを思し入るに、ただ今も消え失する身ともがなとのみ」（一三一—11）思う。中納言内侍から狭衣の文を見せられたときにも、「（狭衣ガ内侍ニ）残りなく言ひ聞かせつらむものをと、恥づかしうて」（一三九—12）なにも言えなくなるのである。ただ恥ずかしがり、死にたがるばかりで、事態に対してなんら現実的に対処しようとしない女二宮の態度が、密通の真相を隠蔽することになったのである。

中納言内侍はどうか。密通の当事者ではない内侍のこの事態に対する対処の仕方は、前二者にくらべると、よほど理性的であるといえる。狭衣の密通という事実は内侍にも驚きではあった。しかし、

前節に見た帝の意向がある以上、狭衣の密通は必ずしも女二宮にとって不都合なことではないばかりか、女二宮に対して関心を示しはじめた狭衣の態度は、むしろ喜ばしいことだと、内侍は判断する。密通の相手が分からないために悩んでいる大宮には同情するが、狭衣と親しい間柄にある自分の立場を考えると、「(狭衣ノ手引キヲ)我がしたるとこそ、(大宮八)思さめ」(一三八―8)と、自分にとって不利な誤解を招くことを恐れ、さらに、上述の、密通の事実は必ずしも女二宮にとって不都合なことではないと考える安心感から、中納言の内侍は密通の真相を隠蔽してしまうのである。

以上のように、密通の真相を知る三人が三様の思惑のもとに、密通の真相を隠蔽してしまったのである。これが原因となって、物語は、懐姙の事実の隠蔽という次の段階に進むことになる。

5

密通の真相を知る三人が三様の思惑のもとに密通の真相を隠蔽しようとした。その結果、密通の相手が狭衣であることを知ることのできなかった大宮は、女二宮の降嫁を急ぐ帝を見て、「さばかり恥づかしげなる人に心置かれたまふやうもや」(一四三―16)と女二宮の将来を案じ、「このこと逃るるわざもがな」(一四四―1)と願う。また、その一方で大宮は、「おのづからけしき見ることもや」(一四四―7)と密通の相手の詮索もしていたが、密通の事実を隠蔽しようとする狭衣は、前節に見たように文を送ることさえ差しひかえるようになったため、「そのしるしと見ゆる反故などだに落ち散らぬ」(一四四―7)という状態が続き、このもくろみも不首尾に終わる。

大宮が女二宮の懐姙に気づいたのはそんな時であった。女二宮の不運な運命を嘆きつつも、宮の降嫁はなんとしても阻止しなければならないと考える大宮は、ごく限られた乳母たちにだけ宮の懐姙の事実を告げ、これを秘密裡に処理しようと画策する。この結果、密通の真相を知っている前述の三人のうち、狭衣と中納言内侍には懐姙の事実が知らされないことになった。

密通の真相を知る狭衣と中納言の内侍には懐姙の事実が知らされず、懐姙の事実を知る大宮や乳母は密通の真相を知らないわけである。この時点でただ一人、事実のすべてを知り、適正な判断をしうるに足る情報をもっていたのは、女二宮である。しかし、その宮は懐姙という現実の前に「やがて消え入る心地して、たけきこととは、引きかづきて泣き入らせたまへる」(一四八―1)だけという有様で、「今日明日にても、まづ先に立ちきこえて、恥づかしくいみじからむ有様を(大宮ニ)見えたてまつらぬわざもがな」(一五二―10)と思うばかりである。懐姙という事態は、女二宮には、恥ずかしい、死にたい、という気持ちを募らせる方向にしかはたらかなかった。

このあと、事態は、真相を知らない人々によって、さらに思いがけない方向に進展させられてゆくことになる。

病気療養のため、という口実で宮中を出た女二宮と大宮は、ともどもに衰弱してゆく。そして、出雲の乳母の発案で、「姫君の御方に聞きにくきことの世に漏れ出でむよりは」(一五二―14)という思惑のもとに、大宮が懐姙したとの偽りの奏上がおおやけに対して行われる。この偽奏によって、女二宮懐姙の事実は部外者に対しては完全に隠蔽されることになった。

大系一五四―16から一五七―14にかけて、狭衣が里居の宮を訪問

する場面がある。この大宮と狭衣の対話場面では、両人が、偽りのない悲しみの心情を互いに述べあっているにもかかわらず、読者にはいいようのない滑稽感を禁じえない。それは、上に見てきたように、狭衣によって隠蔽された密通の真相を大宮は知らず、大宮によって隠蔽された偽奏の真相を狭衣が知らないというすれ違いからくるものにほかならない。物語のクライマックスに向けてのぼりつめていくさなかに、このような皮肉な場面を配しながら、その皮肉については全く触れず、ひたすらあわれな対面シーンを描ききって、かつ読者にそこはかとない滑稽感を抱かせる『狭衣物語』作者の卓抜な構想力は、あらためて高く評価されるべきであると、私は思う。

ちなみに、『狭衣物語』の作者の構想力の確かさは、偽奏以後、女二宮と大宮を競うように衰弱させていくところにも表れている。密通事件以後、不安と悲しみをいかにも解消しえずに苦しむ大宮の悲痛な心中を、たたみかけるように語ることによって、懐姙の偽奏をやむをえない処置として読者に十分に納得させたあと、大宮と女二宮をともども衰弱させる。この間、読者は危機感を抱かずにはいられない。大宮が先に死ねば、折角の偽奏の画策はあっけなく失敗に終わってしまうわけであるから、読者はここに危機感を感じずにはいられないのである。懐姙の偽奏から宮の出産にいたるまでの部分は、この物語のなかでもっとも叙述の密度の濃い部分のひとつと言ってよい。

さて物語は、大宮の容体の危篤を語った直後に、女二宮の出産を語る。この運びはやや芝居がかっているとも見られようが、前述の危機感はこうして解消されるのである。宮の出産を知った大宮は「こよなく力出で来させたまへる心地して」（一五八―15）若宮に対面する。狭衣の顔を写しとったような若宮を見て、大宮は密通の真相を知り、

雲居まで生ひのぼらなむ種蒔きし人も尋ねぬ峰の若松（一五九―4）

の歌を独りごつ。物陰でこの独り言を聞いた中納言内侍も、偽奏の真相を知り、このことを狭衣に告げる。上に見てきた偽奏の隠蔽、密通の隠蔽は、ここにおいて当事者全員の知るところとなり、事件は一応の解決をみるわけである。

二つの隠蔽が生み出すさまざまなすれ違いと、人々の苦悩を描いた、以上の部分を「転」に相当するものとして位置づけたい。

6

女二宮が男児を出産したあと、大宮は急死する。男児は今上の二の宮としておおやけに迎えられ、密通事件以来続いてきた、女二宮のがわの危機は解消した。

しかし、このあとも女二宮降嫁という、この物語始発以来のモチーフはなお解決を見てはいないのである。むしろ、若宮出産のあと、女二宮の降嫁は、事情を知る人々の間では望ましく急ぐべきことと考えられていたからである。中納言の内侍は狭衣に、「大宮さえかくならせたまひぬれば、いとど、何事にてかは（帝ノ意向ガ）おぼしめし変はらせたまはむ。（女二宮ノ）御心地だによろしくならせたまはば、（女二宮ト）同じ御心にこそ、若宮をも見たてまつらせたまはめ」（一六三―5）と、宮との結婚を勧める。しかし、この時点に到ってもなお狭衣は、「それにつけても口をしう、なかなかこそあるべけれ」（一六三―8）と考えている。〈源氏宮の絶対的優位性〉は、上述の諸事件を経てもなお、変わりがないのである。

このように、狭衣が物語の当初からなんら変化することなく〈源氏宮の絶対的優位性〉という幻想にとらわれていっこうに成長しないのに比べると、女二宮は叙上の諸事件を経て成長していたのである。

女二宮降嫁に決着をつけたのは、これまでひたすら沈黙を保ち続けてきた女二宮、その人であった。

大宮を死なせたのは自分である。そして、大宮と自分にこれほどの苦悩をもたらしたのは、狭衣にほかならない。その苦しみのために死に到った大宮の心を思うと、到底狭衣と結ばれる気にはなれない、と、女二宮は思うのである。女二宮がこう思うのはまことにもっともである。これまでは、周囲の人々のなすがままになっていた女二宮であるが、この決意は堅固なものであった。周囲の人々の心配をよそに、女二宮は一切の飲食を拒絶し、衰弱してゆく。女二宮の命をかけての出家の願いは、こうしてかなえられ、物語冒頭から続いてきた降嫁のモチーフはこうして解決されるのである。

女二宮の出家を知った狭衣は、ここに到ってはじめておのれの過ちに気づき、今一度宮に会おうと、里居の宮を訪れるが、狭衣の侵入を察知した宮はかろうじて狭衣の手を逃れ、物陰から狭衣のけはいを息を殺して窺いながら、「大宮の思し入りにしつらさ」（一七一―7）をあらためて心に刻みつけるのである。

今になってようやく女二宮への愛にめざめた狭衣と、もはや「いかで、夢にだに見じ」（一七〇―8）とまで、狭衣を厭い果てる女二宮との間の、埋めがたい隔絶は、この物語の完結を示していると見てよいであろう。(iii)

女二宮の降嫁に始まったこの物語は、人々のさまざまな思惑と、それがひき起こす諸事件を経て、結局は女二宮が決然と世を捨てるという結末に到ったのである。ここに登場する人物はみな、人間の弱さと愚かさをもってはいるが、誰一人として悪意はもっていない。大宮はいうまでもなく、中納言の内侍も、乳母たちも、みな女二宮の幸福を願ったのである。女二宮が厭い果てた狭衣にしてみても、その優柔不断な態度は大宮や女二宮にこの上ない不幸を将来したが、それも悪意から出たものとはいえない。むしろ、源氏宮への執着を絶ち切れないままに女二宮と結婚することは宮の幸福にはつながらない（一二五―1～12）との思惑から出た、むしろ善意のなせるわざであったと見ることもできる。それでもなお、女二宮は一瞬たりとも幸福を感じることのできる時をもつことはなかった。そして、物語の到達した所は、周囲の反対をおし切っての宮の出家である。

こうした筋の展開がなんらかの思想の表れであるとすれば、それは、諸業無常・厭離穢土、というようなことになるであろう。かろうじて自己を実現するためには現世を捨てる以外にはない、という思想は、飛鳥井女君の入水にもうかがえたところであり、これは、『狭衣物語』巻一・巻二に一貫する主題のひとつと見てよいだろうと思う。

7

女二宮降嫁から宮の出家にいたるまでの物語の展開を見てきたわけであるが、この物語は狭衣・女二宮・大宮・中納言内侍・乳母といった人々のさまざまな思惑によって、事件が紆余曲折を経て、意外な結末に到るという構造をもつ。これらの人物のうち、女二宮以下の人物はそれぞれに個性的な性格をもち、物語の進展とともに変化し、成長していくが、それらに比べると、狭衣は初めから終わりまで〈源氏宮の絶対優位性〉の論理に固執するだけで、キャラクタ

ーとしての魅力に欠けるように思われる。無論、上に見てきたように、〈源氏宮の絶対的優位性〉はこの物語の構造を、ある意味では根底で支えている重要なモチーフであるわけで、軽視することはできないが、ストーリーを推進していくのは、むしろ女二宮以下の女たちであるといってよい。

狭衣が〈源氏宮の絶対的優位性〉に固執し、当初のステージからほとんど一歩も前に進まない、したがって、ストーリーの進展にほとんど積極的に関与しない、という構造は、巻一の飛鳥井女君の物語においてもまったく同様であった。このような人物が、果たして物語の主人公といえるのか。

なるほど、狭衣は、出自といい、容姿といい、才能といい、どれをとってみても物語の〈主人公〉としての性格を十分に備えてはいる。物語の伝統にてらし合わせて見ると、かかる性格を具有する狭衣がこの物語の〈主人公〉であることは疑う余地もない。しかし、以上見てきたようなこの物語の構造からすれば、狭衣はこの物語の主役ではまったくないのである。

従来の『狭衣物語』論は、〈主人公〉狭衣の描かれ方ばかりをとりあげてこの物語を論じる傾向が強かった。(iv) 狭衣の行動の優柔不断な点を指摘して、それを平安貴族社会の衰退にともなう世紀末的な世界観の反映である、と説く類の論がそれである。しかし、物語のヒロインたちに共通する、狭衣とは対照的な決然たる身の処し方は、そうした見解とどう折り合うのであろう。〈主人公〉の描かれ方だけに焦点を合わせて物語を論じる従来の安直な方法は、総じて平安末期の物語論には有効ではないと、私は考える。『源氏物語』は「女の、女による、女のための物語」だと、玉上琢弥氏は言われた。以上見てきたようなこの物語の構造からすれば、『狭衣物語』もまさしく「女の物語」にほかならないのであって、『狭衣物語』のこうした構造を考慮することなしに『狭衣物語』の主題を論じてみても、それは甚だ見当違いなものとなるであろうと、私は見ている。

（注）

(i) この源氏宮の東宮入内計画に触れたあと、女二宮の降嫁の件を語るという運びにも、源氏宮と女二宮とを対比的に扱おうとする意図が見られる。ただし、近世流布本の系統の本にはこの東宮入内計画について触れた部分がなく、狭衣の昇進にひき続いて女二宮の降嫁を語る運びになっている。

(ii) 『校註日本文学大系　第五巻』（昭和二年八月）解題

(iii) 狭衣と女二宮のこうした関係はこの後、物語の最後まで変わることがなく、巻三に配された一品宮物語においてはちょうど巻一・巻二において源氏宮が果たしたのと同じ役割を果たす。これについては、「『狭衣』の一品宮　―構造論の試み―」（『語文』第三三輯・昭和五二年六月）に述べた。

(iv) 女二宮の物語に限っていえば、中島尚氏「女二宮の周辺―狭衣物語論のために―」（『言語と文芸』昭和三八年一一月）が、狭衣に焦点を合わせてこの物語を論じている。しかし、これに限らず、狭衣を主人公とすることになんら疑問をもたないままに、多くの『狭衣物語』論が発表されている。